
桂ヒナギクの苦悩

なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桂ヒナギクの苦悩

【Nコード】

N5568J

【作者名】

なお

【あらすじ】

桂ヒナギクは高校二年生、青春真っ盛り。

そして、青春と言えば……恋愛……！彼女が好きな人、綾崎ハヤテのことで頭が一杯……！

そして、恋愛に不可欠なものといえば……悩み……！彼女は好きな人のことで悩みまくり……！

そして……

「ヒナギクさん、実はお話が・・・」

私の目の前には、ハヤテ君がいる・・・。

「なっ、なによ？話つて？？」

「そうですね、・・・」

ハヤテ君の顔はリンゴのようだ・・・。

「その・・・好きです！付き合ってください！！！」

え？え？ツキアツテクダサイ？

「ええええええっ！！！！」

「どうしたのー！、ヒナ？朝っぱらから大きな声だしてー！？」

下から、お義母さんの声がする。

「別になんでもないわー！」

はあ、また夢だったんだ・・・。最近こんな夢ばかり見る・・・。
そっぴや、前にもこんな夢みたわね。

あれは・・・誕生日のちょっと前ぐらいだったかしら・・・。ヒナ
ギクはこんな夢を見ている自分が

恥ずかしくなってきた。

「あーヒナー！言うの忘れてたけど、もう学校に行かなきゃ、遅刻するわよー！！」

「えー？ もう、そんな時間？？？」

ヒナギクはベットから跳ね起きて、制服に着替え、朝ごはんも食べずに玄関を飛び出した。

「いつてきまーす！！」

「あーヒナギクさん、おはようございます！今日もいい天気ですね。」

白皇学院の校門前で、ヒナギクは、ハヤテと会った。

ヒナギクは今朝、あのような夢を見たせいか、ハヤテと目が合わせられなかった。

「・・・おはよう、ハヤテ君。あれ、ナギは？」

「あ、お嬢様なら、今日は、ちょっと風邪をこしらえてお休みです。」

あのヒナギクさん??大丈夫ですか？

なんだか顔がずいぶんと赤いですけど・・・？」

「なんでもないわよっ!!」

ヒナギクは時計台に走り出した。後ろで、またヒナギクさんを怒らしてしまった、と悲しんでいるハヤテを

残して。

ヒナギクは走っている途中、思った。なぜ、私がこんなにハヤテ君を意識しなければならぬのか？

無論、好きだからである。だが、最近特に意識するようになってきた。今まではなんとか普通に話してこれ

たのだが、どうも最近、普通に話せない。そして、ハヤテをヒナギクは避けている。

彼女も避けたいわけじゃない。ただ、自分の恥ずかしい態度をハヤテに見せたくないのだ。

恋する乙女の頭のなかはピンク色だ。彼女の髪の色と同じで。

「ヒナちゃん。寂しいよ・・・」

生徒会三人娘の一人、瀬川泉がヒナギクのところへ来た。

「あんだねえ・・・理沙と美希がいなくらいで、めそめそしないの！ってというかそんな用事で生徒会室に

来ないでくれる??」

「だってねえ、私たちは三人でひとりなんだよ！」

「知らない！出て行つて!!」

ヒナギクは不意にどなり声になってしまった。

それを聞いた泉は、ビクツとして、生徒会室からそそくさと出て行った。

「はあ・・・」

ヒナギクはどなり声をあげた自分が恥ずかしく思えた。

罪悪感がこみ上げてくる。

そこに

「ヒナギクさん、なにかお手伝いできることはありませんか？」

最悪なタイミングでハヤテが生徒会室に来た。

ハヤテの声を聞いた瞬間、ヒナギクは椅子から立ち上がり、

「ハヤテ君に手伝える仕事なんか何もないわよ！！出て行って！！」

ヒナギクはハツとした。私、またどなり声をあげてしまった・・・。
しかもよりによってハヤテ君に。

「え・・・そうですか・・・。わかりました・・・。」

そう言つて、ハヤテは降りて行つた・・・。

「待つて、ハヤテ君！！」

彼女の声はハヤテには届いていなかった。

その後、ヒナギクはずっと罪悪感にとりつかれていた。

「ヒナさ〜ん、どうしたんですか??そんな暗い顔して。」

帰り道、普通に歩いて帰っていたら、西沢さんに会った。

「あ、あゆ、あゆむ・・・。」

「どっ、どうしたのかな??」

ヒナギクの感情が一気に爆発した。

「うえ〜ん・・・」

「どうしたのかなっ??ヒナさん!」

「だっ、だつてねえ、ぐすつ、そんなのっ、そんあことちかたないじゃない!!う、うう、グすつ」

「いや、ヒナさん??ま、まあ、私の家にいまから来てください。こんな道の真ん中で泣かれても困りますし・・・。」

ヒナギクは少しあたりをみましてみた。すると道行く人々がこちらを見ている。

「うん・・・」

ヒナギクは本日二度目の赤面を食らった。

「そういうことですか。大体ヒナさんの事情はわかりました。」

ヒナギクは親友である歩にすべてを打ち明けた。

自分がどうしてもハヤテ君に素直になれないこと。

どうしてもハヤテ君にきつく当たってしまうこと。

どうしても、ハヤテ君の前ではかわいくなれないこと。

すべてを包み隠さず話した。

「こんなこと、歩にしか相談できなくて・・・」

「ヒナさんは無理しすぎなんですよ。」

「え?？」

「だからね、別にハヤテ君の前でかわいく見せなくてもいいんじゃないかな?って。」

「だって、男の子ってかわいい女の子が好きでしょ??」

「まあ、そうですね、ヒナさんは今までのヒナさん、私と話してる時のヒナさん、自分のきもちに素直に

なれないからハヤテ君にちょっと、強く当たるヒナさん、みんなかわいいんじゃないかな!」

ヒナギクはかわいいと言われて本日三回目の赤面をした。

「ほらっ、今のヒナさんすごくかわいいですよ!」

「え?」

「もっと自分に自信をもったらいいんじゃないかな?せっかくかわ

いいんだから。」

ヒナギクは、混乱してきた。これだけ、かわいいと言われたのは初めてだからだ。

いつもは格好いい、とか男の子みたい、とか言われてきたからこう
という言葉には免疫がない。

「そ、そう？私ってかわいい？？」

「そうですよ！！すっごくかわいいですよ！！あ、でも自意識過剰
になったらだめだよ？」

「もっつ！そんなわけないでしょ？くすっ」

自然と笑みがこぼれた。本日最初の笑いだ。

「もう、大丈夫かな？」

「うん、大丈夫。ありがとう。歩のおかげで元気がでた。」

「ヒナさんが泣いているのを見るのは私も辛いから、これから悩

みがあったら、あんなことになる前

に言ってくれるとうれしいな。親友なんだから。」

ヒナギクはその言葉に感動した。

「ありがとう。私たちいつまでたっても親友でいようね」

「あたりまえじゃないかな。そして、ハヤテ君をとりあうライバル
でもいようね。」

「じゃあ、私、そろそろ帰るわ。バイバイ!」

ヒナギクは家のベットの上で色々考えた。

明日、ハヤテ君に会ったらなんて謝ろう? ごめんなさいじゃ普通す
ぎていやだ。

そして、泉にも謝らなくちゃいけない。

でも、もう大丈夫。ハヤテ君の顔はちゃんと、見える。

自分に自信をもって、ハヤテ君と明日、会おう。そして、また仲良
く、楽しく遊びたい。

この青春を無駄にしたくないから。

（後書き）

どうでした？

感想などあれば是非書き込んでください。

悪い点とか大歓迎です。

そっこのが成長するのに必要なんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5568j/>

桂ヒナギクの苦悩

2010年10月19日08時32分発行